

踏 み 跡 < My mountains >

奥秩父	岩屋林道から 国師ヶ岳・石楠花林道	No.049
-----	-------------------	--------

前回に引き続き、夏山の準備を兼ねての山行。今回の目的は、天幕とコンロのチェック及び天幕を背負って歩くことの試行。井口は行けず、代わりに村越を誘った。(彼は夏山の大山行には参加しないが)
 今までに何度かの縦走で奥秩父の主稜線はことごとく赤く塗りつぶされた。奥秩父という山は、私だけかもしれないが、主稜を越えて甲州から信州へまたは信州から甲州へ、歩いてみたいコースが沢山ある。梓山から国師ヶ岳に入る「岩屋林道」と、国師ヶ岳南面の「石楠花新道」もそのひとつに数えられる。

昭和40年7月10日

0時20分発臨時列車、甲斐路の朝は曇天で何も見えない。小淵沢5時40分着。小海線は7時10分発。信濃川上で下車して8時35分発のバスで千曲川を遡り梓山へ。9時35分行動開始。

千曲川の支流である梓川に沿って遡り国師ヶ岳に登る今回のルートは、途中に岩屋があることから、岩屋林道と名が付いている。そば降る雨の中をポンチョに蒸されて歩く道は、体には登りと感じられない程度の緩やかな登りが続く。景色の変化はあまりなく、ただ休みなく聞こえる沢の瀬音だけ。

途中で昼食10時45分～11時20分。

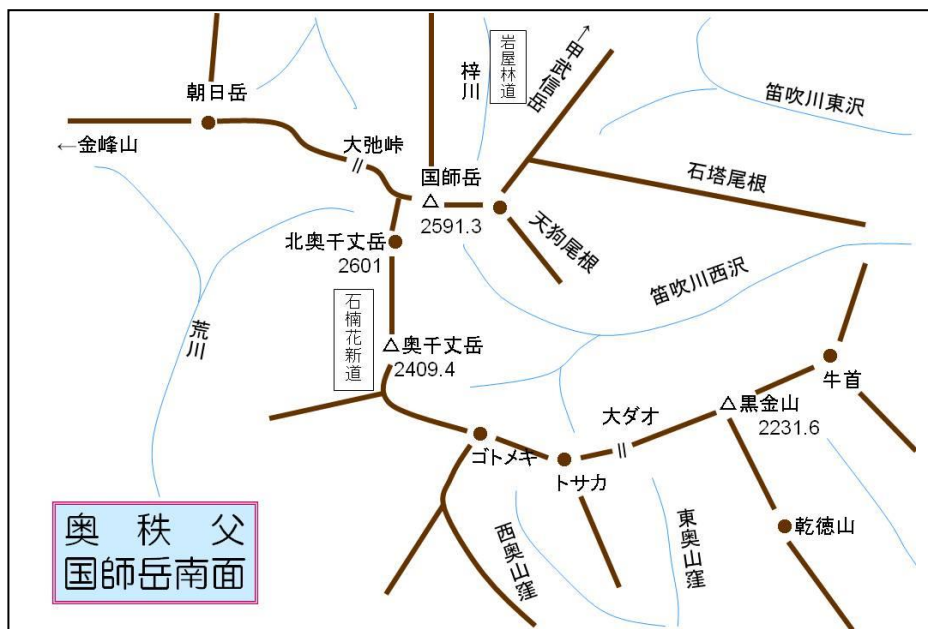
金峰山川に抜ける梓久保林道を分け、しばらくして岩屋が現れた。14時05分、梓山から雨の中を四時間、いささかげんなりしてしまった。岩屋は庇のように張り出した岩の下が砂地になっていて、ビバークには最適な場所だ。入口は高さ2m余りあり奥に入ると多少低くなっている。水は目の前の沢に無尽蔵に流れている。今日はここに天幕を張ることに決定。

天幕を張った後、空身で国師ヶ岳を往復。2591mの頂上は、天気良ければ富士山をはじめとして素晴らしい眺めが得られるところだが、残念ながら一面の霧の海。

16時15分、岩屋に戻って夕食の仕度。天幕に入ると沢の流れが岩屋に響いてさらに大きくなって戻ってくる。うるさいなと思いつつもいつの間にか眠りに入った。

昭和40年7月11日

起床 4時40分、やはり一面の曇り空で出かける気がしないが、しかたなく6時10分出発。



昨日登った道を国師ヶ岳へ一時間の登り。国師ヶ岳頂上7時15分、苦勞して登っても何も見えず、がっかりするばかり。7時30分出発。頂上からわずかに西へ下りそこから主稜と分かれて南へ走る尾根が石楠花新道。いつか歩いてみたいと思っていた稜線だ。この尾根に入って最初のピーク北奥千丈岳は、奥秩父の中では最高峰の海拔2601mにもかかわらず、忘れられた存在。8時15分に到着。人の訪れも

少ない小ぢんまりした頂上は、国師ヶ岳に似て花崗岩の砂地の中に一抱えほどの岩がいくつかある。この辺

踏み跡 < My mountains >

からその名のとおり、右も左も石楠花が群生するようになるが、残念ながらまだ蕾は硬く唇を閉ざしている。満開の頃なら、まさしく石楠花新道と言うにふさわしい風景に違いない。8時30分出発。

2511m峰、奥千丈岳(2409.6m)を過ぎると急激に高度を下げ始める。ゴトメキ10時半。

大ダオ(1966m)13時30分、最後の休憩は30分の中休止。下るにつれてハイマツや石楠花はなくなり、樹林帯に入る。同じ樹林帯でも南面の甲州側は北面の信州側に比べて明るく、苔むすジメジメしたような光景は見られない。風もさほど強くないと見えて、どの木も伸び伸びと天を突いている。

やや晴れ間も見えてきて、頂上の禿げた黒金山と岩を乗せた乾徳山を結ぶ尾根が見えてきたが、時すでに遅く我々は大ダオから東奥山窪のゴア口に入っていた。

松霞新道分岐から乾徳山から下りてくる連中と一緒に、我々の周囲にやっと人間の臭いが感じられるようになってきた。松霞新道は、徳和の山登旅館のおばあさんの雅号「松霞」をとって付けたもので、この人が乾徳のおばあちゃん」と親しまれていることから、この道にその名が付いたようだ。

終着点の徳和に16時25分に到着。16時50分のバスで塩山駅へ。

大菩薩から、乾徳からと、下山して来るハイカーが押し寄せる塩山駅はどうも苦手だ。手帳には何も書いてなかったが、多分この日も帰りの電車は混んでいただろうと思う。

以上

さあ、あと20日で夏山の大計画「南アルプス縦走」だ。

このところ二回の山行では体調も非常に良い。後は成功を祈るばかり!!

(修正・更新:2023年10月)